

みんなで 楽しく上映会

上映する作品選びからはじめる “感動を共有”し、豊かな心育てる

家庭での〈映像〉の視聴方法は、大きく変化しています。1台のテレビを家族全員で見る“一家団らん”の姿は少なくなり、一人ひとりがテレビを持つようになってきました。レンタルDVDや、ネット配信や動画共有サイトをとおして、一人で視聴することも珍しくなくなりました。

一人ひとりで映像作品を見るが多くなった結果、一つの作品を見ながらみんなで笑ったり、涙を流したり——“感動を共有する”経験が乏しくなりました。

映画を見終わったあと、おもしろかった、悲しかった、楽しかった、かわいそうだった——みんなで感想を話し合うことで、より深く作品にふれることができます。みんなの意見も参考に、自分の見方を見直し、心を成長させ豊かにしていくのです。

“感動を共有する”映画会をとおして、心を成長させてきました。

かつては、どの町にも“映画館”がありました。子どもたちは、真っ暗な部屋のなかで、大きなスクリーンに映し出される映画を、わくわく、ドキドキ、ハラハラしながら、みんなと一緒に楽しみました。たくさんの人と“一緒に映画を見る”ことで、共通する話題を持つことができます。感想などを話すうちに、互いの理解を深めると同時に、自分自身のもの見方も豊かにしていきました。

映像を中心としたメディア・リテラシーの重要性が指摘されるなか、映像を見る＝上映会の意味を見直す必要があるのではないのでしょうか？



●上映する作品を選ぶ

図書館や視聴覚ライブラリーなどで、上映可能なDVDやビデオソフトの貸出しをしているところがあるので、じょうずに利用します。収蔵作品のリストやカタログを取り寄せて、どのような作品があるのかを調べます。最近ではインターネットでリストを公開しているところもあります。

【2時間くらいの長編の作品もよいが、15～30分くらいの短編を数本組み合わせさせて選ぶほうがよい】

映画館向けの長編作品は、90～120分くらいの長さです。長時間なので、低学年の子どもや幼児が飽きてしまうことがあります。上映する場合には、トイレ休憩を設けたりすることも必要になります。

短編作品は、幼児や低学年に適した作品も多く、上映会のねらいにあわせて、いろいろな作品を組み合わせることができる利点があります。

【タイトルだけで選ばずに、実際に作品を見てから選ぶ】

見たことがない作品は、事前に試写をして内容を確認しておくことが必要です。タイトルが同じでも、作品の内容（表現方法など）が異なります。同じ『かぐや姫』でも、テレビアニメのような絵柄もあれば、人形のアニメ、生の人形劇や演劇を収録したものもあります。

子どもたちにどのような作品を見せたいのか、ねらいをはっきりさせてから、作品選びをします。絵本選びなどと同じように、実際に見て“いいなあ”と感じ、子どもたちに見せたいと思うものを選ぶようにします。



【アニメもいいが、実写の作品も】

せっかくの上映会ですから、子どもたちがテレビで見ているアニメや、その映画版ではなく、ふだん見ることができない作

品を選ぶようにします。

実写の劇映画にも、子どもの鑑賞に適した作品があります。学校の授業時間に見ることを前提として制作されている児童劇映画は、30～40分という上映時間で、子どもたちが感情移入しやすいストーリーで構成されています。

映画全盛期に活躍していたベテランの映画監督が手がけた作品も多く、その職人的な手腕で観客の子どもたちを感動に誘います。

●会場の雰囲気を実物の“映画館”に近づける

上映会の会場は、いつも使っている部屋でも、ちょっと工夫をして“映画館”にすることが重要です。部屋を暗くし、画面以外のものは目に入らないように片付けます。真っ暗にできなくても、外の光が入らない部屋を選んで、カーテンを閉めます。できるだけ、本物の“映画館”に近い雰囲気を作り出すことが大切です。暗闇を怖がる小さい子もいます。保護者に付き添ってもらうようにお願いします。

大きな児童館・児童センターなどでは、子どもたちがいるるな〈あそび〉に参加したくて、途中で入退場を繰り返すこともあります。上映会と他の催しが重ならないように、スケジュール作りにも配慮します。

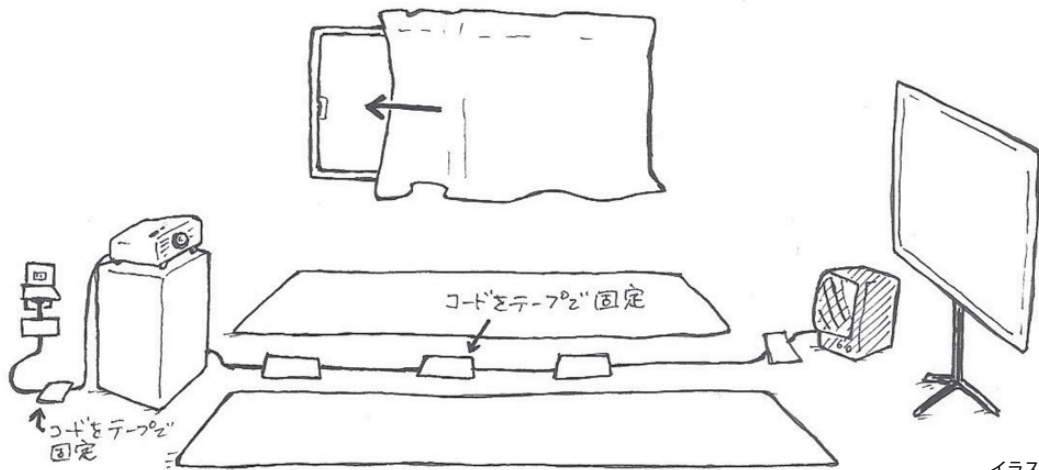
□上映作品を選ぶ□

どのような作品を上映するのかを、考えることから始まります。“娯楽”だけではなく、せっかくみんなで見るのだから、子どもたちの心に残るものを選ぶ必要があると思うからです。

【子どもの城】では、ふだん見ることができない作品を選んで、映像表現の幅広さやおもしろさを伝えるようにしています。テレビでは見ることができない、海外の優れた短編アニメ——切り絵、人形（立体）、クレイ（粘土）などの技法を使ったものなど、多彩な表現方法を取り入れた作品を選んでいきます。

小さい子には難しいと思える芸術性あふれる作品なども、見せ方を工夫すれば、子どもの好奇心を刺激し、映像に対する視野を広げることができます。

テレビで放送されている作品は、激しい戦闘や競争などで興味を引きつけるものが多いので、子どもたちが物語のおもしろさや豊かさを楽しむ作品（童話や絵本を題材にした作品など）を選ぶようにしています。海外には絵本をていねいにアニメ化した作品が多く、幼児にも適しています。

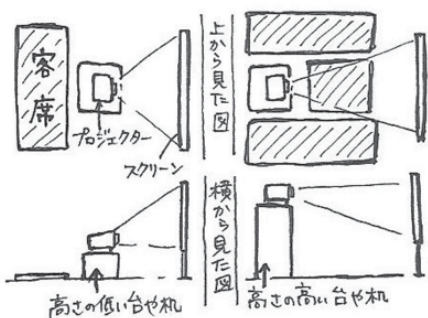


イラスト：いがき けいこ

●上映会場を設営する

上映会場に、プロジェクターとスクリーンをセットします。液晶プロジェクターでは、60インチから100インチぐらいの大画面の映写が可能です。プロジェクターにDVDプレーヤーをつなげば、DVDを大画面に映写することができます。

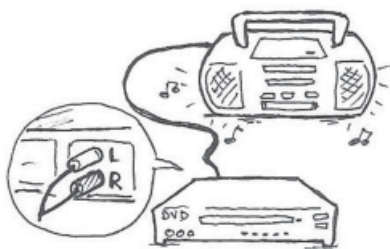
スクリーンがない場合は、白い壁や白の模造紙をはり合わせて、即席のスクリーンにします。シートは、しわが目立ってしまうのと、光が後ろに透けてしてしまうので、あまりお奨めできません。



※プロジェクターを低い位置に置く場合は、その後ろに客席を作ります。高い位置に置くと、その前に座って見る席を作ることができます。プロジェクターをしっかりと固定することが大切です。

音声もポイントになります。大きな画面で楽しむためには、音声も大きくする必要があります。プロジェクターにも小さなスピーカーが付いていますが、それでは音量不足です。DVDプレーヤーの音声出力をPA装置（アンプ＋スピーカー）につないで、大きな音声で聞けるようにします。

催しで使う小型のPA装置には、マイク入力以外に外部音声入力端子が付いています。そこにDVDデッキの音声出力を接続します。PA装置が無い場合には、外部音声入力端子付のラジカセやミニコンボでも、十分に実用になります。



※ラジカセに外部入力(AUX)がなく、マイク入力しかない場合には、入力レベルを変換する「抵抗入りコード」を使用します。

□「暗闇」で見ることの意味——気持ちを画面に集中させる□

家庭にも大型テレビが普及しています。大きな画面で映画を見れば迫力も十分で、「映画館」の雰囲気を味わえるかもしれません。しかし、お母さんが家事をしていたり、携帯電話やメールの呼び出し音があったり、周辺には「ふだんの生活」が広がっています。専用ルームでも作らないかぎり、画面に集中して映画を楽しむことが難しいのが実際です。

映画館のような「暗闇」は、いつもとは違う世界にいることを実感させます。いつもとは違う世界に誘い込む「暗闇」こそが、見る人を画面に集中させ、映画の世界を楽しませてくれるのです。

●いよいよ上映会——子どもとの会話が大切

開始時間がきたら上映をはじめ、上映が終了したら「さようなら」では、せっかく子どもたちと映画を楽しんでも、「感動を共有」することができません。前後の時間を使って、上映作品を題材に子どもたちと話し、映像への理解を深めます。

上映前は、これから見る作品への期待を高める時間です。どんなストーリーなのか、いつの時代の物語なのか、どのような登場人物なのかなど、作品理解を助けるものを少し、分かりやすく話します。これで、子どもたちが「よし見るぞ」という気持ちになっていきます。

あらすじを話し過ぎると、かえってつまらなくなるので要注意です。言葉（せりふ）がついていない作品でも、「表情や仕草などを見ていると、何を言いたいのか、何を考えているのかわかるよ」というように、楽しく映画を見るためのヒントを伝えるようにします。

例えば、いろいろな映像表現の魅力を知ってもらおうと考え、海外の短編アニメの上映会を企画しました。作品のなかには、いろいろな色や形の模様が乱舞するような、抽象的なアニメーションもあります。説明もなく上映すると、「なんか、変」「わかんない」となります。途中で退場してしまうかもしれません。

上映の前に、「画面に出てきた模様が何に見えたか、あとで教えてね」「いろいろな色が音楽に合わせて踊るよ。どんな色が出てくるかな、どんな楽器の音がするかな。その音を聞いてどう思ったか話してね」と、最初に見方のポイントを投げかけると、子どもたちの画面への集中力が高まります。

子どもたちは、画面のなかの動きを見逃さないように、最後まで真剣に見つめます。「傘のように見えた」「花が咲いていたみたいだった」「赤い色の時は太鼓、黄色の時はラップだった」というように、たくさんの感想を話してくれます。気づいたこと、思ったこと、感じたこと——子どもたちは、率直にたくさんのお話を話してくれます。

●心の豊かさを広げる上映会

上映後には、感想を述べ合う時間を設けます。自分が気づいたこと、感じたことを話し合います。自分とは別なところにおもしろさを感じたり、別な見方をする子どももいます。それぞれの感じ方が違うこと、いろいろな見方があることを知る機会になります。ひとつの作品をみんなで見ることで得られる、貴重な経験です。

映画の見方・感じ方は、人それぞれです。映画はこう見なければいけない、ということはありません。一人ひとりの感じ方が大切なのです。それぞれの感じたことを多くの人と話し合い、認めあうことで心の豊かさがつちかわれます。これこそが「芸術」を鑑賞する大きな目的であり、それを手軽にできるのが映画などの上映会であると言えます。